



金沢には日本三大名園の一つである兼六園を中心に市街地を流れる二つの川があります。一つは、おおらかな流れから「おとこ川」と呼ばれる「犀川」<sup>さいがわ</sup>、一つは、ゆるやかな流れから「おんな川」と呼ばれる「浅野川」<sup>あさの がわ</sup>です。

この両川を横架する金沢市街を東西に結ぶ重要な幹線道路である一般国道157号と159号の橋が、「犀川大橋」と「浅野川大橋」です。加賀藩祖、前田利家が木橋にて架けたのが最初といわれており、その後、度重なる洪水による落橋の悲運に遭いながら姿を変えてきました。

現在の「犀川大橋」は、大正13年に建造され、トラス式鉄橋として鋼材を組み合わせた造形から男性的な力強さを感じさせます。また「浅野川大橋」は、大正11年に建造され、三つのアーチで組まれたコンクリート製の造形から女性的な美しく落ち着いた感じを醸し出しており、両橋ともに周辺の情緒ある街並みとの調和が形成されています。

平成12年に国の「登録有形文化財」に2橋揃って指定されており、観光都市「金沢」を代表するスポットとしても貢献しています。

### 犀川大橋～人々の営みを支える橋～

一般国道157号 橋長：62.3m

日本の橋梁技術の先駆者である関場茂樹<sup>せきばしげき</sup>が設計を手がけた下路式単純曲弦ワーレントラス橋で大正13年に竣工しました。鋼材には英国製の材料も使用されています。架橋から80年以上経った現在においても県都の幹線橋として、昼夜を問わず多

くの車（3万5,000台/日）や人々が行き交っています。金沢を代表する繁華街、片町の南口に位置しており、夜ともなるとネオンの光を浴びて幻想的な表情を見せてくれます。秋には、橋と川がもたらす恩恵を再認識し、犀川ゆかりの郷土の文豪<sup>むろ う さいせい</sup>「室生犀星」をたたえる「金沢・犀川犀星まつり」が行われ、その期間中は犀川大橋がライトアップされ、一層美しい構造体と塗装グラデーションが浮かび上がります。



犀川大橋



金沢・犀川犀星まつり（遠方に犀川大橋）

## 浅野川大橋～伝統，文化を育む橋～

一般国道159号 橋長：54.5m

唐草模様に入った格子高欄，五灯式あんどん照明，赤戸室石を用いた側壁レリーフなどが施された3径間の連続RC固定アーチ橋で，大正時代の面影を現在に伝えていています。周辺には茶屋街があり，春には桜や芸妓さんの水芸や踊りといった伝統芸能を楽しむことができる園遊会が行われ，冬には友禅流しといった風情を感じることができます。川面に美しい白いアーチを映す浅野川大橋



浅野川大橋

は，城下町のしっとりとした景観に溶け込み，伝統文化や趣を脈々と受け継いでいます。

金沢らしさを象徴する地域のシンボルとして多くの人に親しまれる「犀川大橋」と「浅野川大橋」。この両橋を今後も適切な維持補修を行いながら後世に引き継いでいきたいと考えています。

金沢河川国道事務所作成の土木遺産「犀川大橋と浅野川大橋」のパンフレットと金沢市産業局観光交流課（電話076 220 2194）作成の「金沢城下町見て歩き地図」を参考に原稿を作成した。



犀川大橋，浅野川大橋位置図

<p><b>【交通】</b> JR 金沢駅よりバスにて武蔵交差点経由で浅野川まで約5分（約1.5km），犀川まで約10分（約2.0km）</p> <p><b>【探訪コース】</b> 犀川大橋周辺 70以上の寺院が並び立つ寺町の下を悠然と流れる犀川が季節に彩りを添えます。兼六園の入り口向かいの石浦神社から広坂を上ると県立美術館，歴史博物</p>	<p>館，能楽堂などが並びます。長い石段を下り，本多町を通って犀川に架かる桜橋を渡り，さまざまな寺院が並び寺町へとつながっています。「室生犀星」は，犀川を「美しき川は流れたり。そのほとりに我は住みぬ」と詠っています。</p> <p>浅野川大橋周辺 兼六園のすぐ下の観光物産館をスタートして浅野川へ。文豪いづみきょうか「泉鏡花」の名作「義血侠</p>	<p>けつ血」（この作品はのちに「滝の白糸」と改題）の舞台となった天神橋・梅の橋や浅野川，周辺の茶屋街を経て，約170軒の店が立ち並び金沢市民の台所，近江町市場で活きのいい新鮮な魚介類や野菜を求めることができます。</p> <p><b>【特産品】</b> 伝統工芸品（加賀友禅・金箔・九谷焼他），新鮮な野菜・魚介類他多数</p>
--	--	--